

『渋沢栄一伝記資料』のTEI適用へ向けて

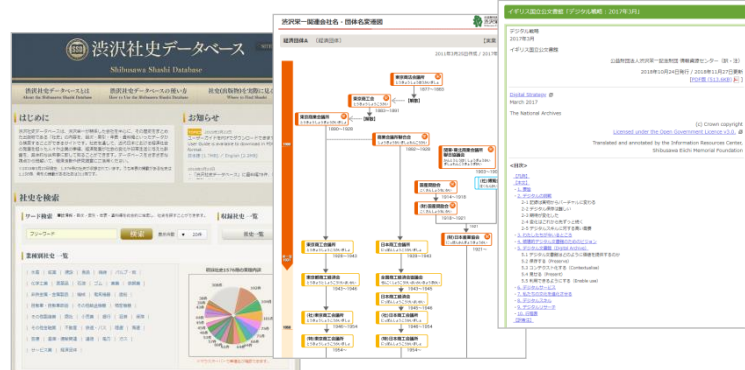
井上さやか、金甫榮、茂原暢
(公益財団法人渋沢栄一記念財団)

国立歴史民俗博物館 総合資料学の創成
第2回人文情報ユニット研究会
2020年12月22日(火)

『渋沢栄一伝記資料』デジタル化プロジェクト



社史プロジェクト



「実業史錦絵絵引」



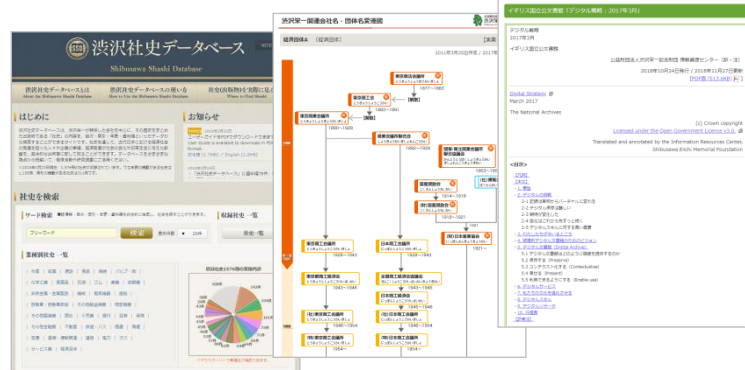
「渋沢敬三アーカイブ」



『渋沢栄一伝記資料』デジタル化プロジェクト



社史プロジェクト



「実業史錦絵絵引」



「渋沢敬三アーカイブ」



目次

1. 3つのテキスト・コンテンツ:

- 1.1 渋沢敬三アーカイブ(2012.09)
- 1.2 デジタル版『渋沢栄一伝記資料』(2016.11)
- 1.3 デジタル版「実験論語処世談」(2017.03)

2. 『伝記資料』別巻にTEIを適用するに至った経緯

3. TEIを適用して得た知見と課題


1-1. 渋沢敬三アーカイブ (2012.09)

<https://shibusawakeizo.jp>

渋沢敬三アーカイブ

一生、著作、資料

渋沢敬三記念事業 公式サイト



渋沢敬三とは

1896年生まれ。17歳の年に東京府である祖父・流年一への後継となる。第一銀行に勤務した後、第二次世界大戦終了直後に日本銀行総務、大蔵大臣をつとめ、戦後期の日本経済において重要な役割を果たす。その一方で「アチック・ミュージアム」を立ち上げるなど、文化的・学術的な活動にも力を入れた。号は「鯉魚洞（さいぎょうどう）」、1963年没。

関連イベント

渋沢敬三記念事業実行委員会および実行委員が所屬する各機関では、渋沢敬三没後50年となる2013年に向け、「渋沢敬三記念事業」として、敬三に関する企画展や講演会、シンポジウムなどを開催しました。

▶ 渋沢敬三 関連イベント一覧

もうひとつの民間学

2013年9月7日(土)
13:30-17:00

知人・文化人としての渋沢敬三

戦時後史の立役者

2013年9月14日(土)
13:30-16:45

渋沢敬三



渋沢敬三について

経済人としてだけでなく、文化・学術の理解者であり支援者でもあった渋沢敬三を、「経済人として」「文化人として」「歴史の立役者として」という3つのカテゴリーでご紹介します。

▶ 渋沢敬三についてを見る



著作を読む

渋沢敬三の多面的に幅広い業績を表している様々な著作を、1992年から1993年にかけて平凡社より刊行された『渋沢敬三著作集』全5巻を中心に公開しています。

▶ 渋沢敬三の著作を読む



渋沢敬三 年譜

日本の近代資本主義の父とも言われる渋沢一への探求で、経済界での活躍に加え政府の要職も務め、学問の発展にも大きく貢献した渋沢敬三の生涯を年譜でたどります。

▶ 渋沢敬三年譜を見る


渋沢敬三 記念事業

実業や文化事業に大きな足跡を残した渋沢敬三の人間性や業績を、総合的に検証・研究し、その成果を



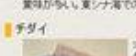
『渋沢敬三著作集』（eReadingによる自動脚注表示機能など）

キダイ



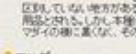
キダイはマダイと似て、小型の魚で、体長約10cm程度。体色は青灰色で、側面に縦縞が入る。主に日本列島の沿岸域に分布し、水深10m以内の浅海域に生息する。食用魚として利用される。また、観賞魚としても人気がある。

チダイ




本種は、ヒシロギと似て、体長約10cm程度。体色は青灰色で、側面に縦縞が入る。主に日本列島の沿岸域に分布し、水深10m以内の浅海域に生息する。食用魚として利用される。また、観賞魚としても人気がある。

マハゼ




日本では北海道から九州まで広く分布する。また、東北地方から九州にかけての沿岸域に生息する。食用魚として利用される。また、観賞魚としても人気がある。

アマジ




本種は日本各地の沿岸域に広く分布する。また、東北地方から九州にかけての沿岸域に生息する。食用魚として利用される。また、観賞魚としても人気がある。

マダイ



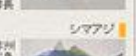
本種は日本各地の沿岸域に広く分布する。また、東北地方から九州にかけての沿岸域に生息する。食用魚として利用される。また、観賞魚としても人気がある。

イトヒキアジ



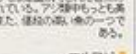
本種は日本各地の沿岸域に広く分布する。また、東北地方から九州にかけての沿岸域に生息する。食用魚として利用される。また、観賞魚としても人気がある。

シマアジ



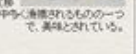
本種は日本各地の沿岸域に広く分布する。また、東北地方から九州にかけての沿岸域に生息する。食用魚として利用される。また、観賞魚としても人気がある。

マルアジ




本種は日本各地の沿岸域に広く分布する。また、東北地方から九州にかけての沿岸域に生息する。食用魚として利用される。また、観賞魚としても人気がある。

ムロアジ



本種は日本各地の沿岸域に広く分布する。また、東北地方から九州にかけての沿岸域に生息する。食用魚として利用される。また、観賞魚としても人気がある。

ニクハゼ



本種は日本各地の沿岸域に広く分布する。また、東北地方から九州にかけての沿岸域に生息する。食用魚として利用される。また、観賞魚としても人気がある。

1-1. 渋沢敬三アーカイブ (2012.09)

<https://shibusawakeizo.jp>

htmlベースのテキスト公開の例：渋沢雅英著『父・渋沢敬三』

渋沢敬三の伝記

著作・記事を読む

・ 著作・記事を読むトップ ・ 渋沢敬三の著作 ・ 渋沢敬三の伝記 ・ 語られた渋沢敬三

文字サイズ 通常 大 特大

父・渋沢敬三 [7] / 渋沢雅英

渋沢雅英著『父・渋沢敬三』（実業之日本社、1966.10） p.131-149掲載
[< 目次](#) | [1](#) | [2](#) | [3](#) | [4](#) | [5](#) | [6](#) | [7](#) | [8](#) | [9](#) | [10](#) | [あとがき](#) >

第七章 家庭

父はなかなかの旅行家であった。アフリカと南極をのぞく全大陸にまたがる世界旅行の経歴は相当のもので、国内でも行ったことのない県はなかった。「僕には日本中に第五部隊がいるんだ。」と言うのが得意で、たしかにありとあらゆる村や町に、父を親身になって歓迎してくれる友人があった。土地の名士や旧家の人々もあったし、また農家、漁民、学校の先生など付合いはきわめて多岐にわたっていた。

『柏葉拾遺』や『犬歩当緯録』に旅譜として記載してあるものだけを拾っても、明治四十二年中学一年のとき、親子に修学旅行に行ったのを始め、昭和三十五年八月まで五十二年間に四百八十回の旅行の記事が見える。その間大正十年はノートが紛失して記載もれになっているので、毎年少なくとも十回は旅行していることになる。純然たる会社の用のこともあったが、多くの場合は学問的興味をも含めての旅行が多い。ずらりと並んだ旅譜を見ると、旺盛な向学心とそれを裏づける体力が、身に迫ってくるような感じがする。

第七節 家庭

父はなかなかの旅行家であった。アフリカと南極をのぞく全大陸にまたがる世界旅行の経歴は相当のもので、国内でも行ったことのない県はなかった。「僕には日本中に第五部隊がいるんだ。」と言うのが得意で、たしかにありとあらゆる村や町に、父を親身になって歓迎してくれる友人があった。土地の名士や旧家の人々もあったし、また農家、漁民、学校の先生など付合いはきわめて多岐にわたっていた。

『柏葉拾遺』や『犬歩当緯録』に旅譜として記載してあるものだけを拾っても、明治四十二年中学一年のとき、親子に修学旅行に行ったのを始め、昭和三十五年八月まで五十二年間に四百八十回の旅行の記事が見える。その間大正十年はノートが紛失して記載もれになっているので、毎年少なくとも十回は旅行していることになる。純然たる会社の用のこともあったが、多くの場合は学問的興味をも含めての旅行が多い。ずらりと並んだ旅譜を見ると、旺盛な向学心とそれを裏づける体力が、身に迫ってくるような感じがする。

たいていは会社の人や学問の仲間との同行が多かったが、たまには私たち家族も連れて行ってもらったことがあった。私がおぼえている限りで一番始める、小学校一年か二年の頃、静岡の三津浜で静養している父を見舞ったときだった。春休みのころだったか、二三日滞在した。父はよく私を釣に連れて行ってくれた。

まだ雪をかぶって美しい富士山が影を落している鏡のような湖面に船をとめて、父も私も黙って糸をたれる。船頭のやるのを見よう見真似で、私はアオリイカを二匹釣りあげた。その手つきがいていって父にほめられた。「だから漁師は七つから八つの時から修業しなければだめだ。小学校などに行っていたらい漁師はできない。教育も大切だがそれとていってよく考えてやらなければ…」などと父が同行の人たちに話していたのをおぼえている。

小学校を卒業すると、いっこうにできがよくなかった私が、どうしたはずみか、当時入学試験が難しいと言われた武蔵高校の尋常科に合格した。父はたいへん喜んで母と私を連れて京都見物に出かけて行った。

1-2. デジタル版『渋沢栄一伝記資料』 (2016.11)

<https://eiichi.shibusawa.or.jp/denkishiryō/digital/main/>

渋沢栄一(1840-1931):

- ・「近代日本資本主義の父」「社会企業家の先駆者」
- ・ 約500の企業、約600の社会公共事業に関与
- ・ 膨大な資料が残る



渋沢栄一『処世の大道』より

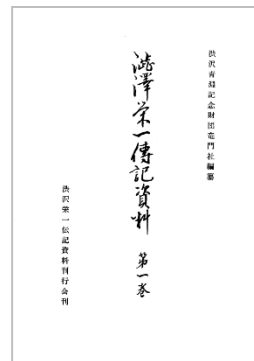
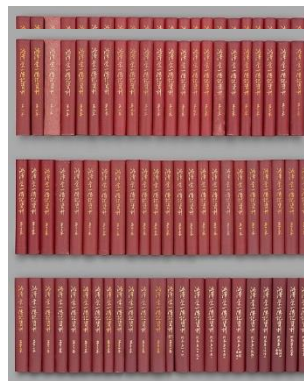
『渋沢栄一伝記資料』(渋沢青淵記念財団竜門社, 1955-1971):

- ・伝記ではなく伝記を書くための資料集
- ・全68巻(本編:57巻+索引巻、別巻:10巻)

総計 約48,000ページ、4800万文字

本編:年代別／事業別の階層構造(最大7階層)

別巻:日記／書簡／講演録／写真など(種別ごと)



本編：事業別の編年体（「綱文」方式）

巻	編	部	章
1-3	第1編（天保11年～明治6年）在郷及ビ仕官時代		
		第1部 在郷時代	第1章 幼少年時代; 第2章 青年志士時代
		第2部 亡命及ビ仕官時代	第1章 亡命及ビ一橋家仕官時代; 第2章 幕府仕官時代; 第3章 静岡藩仕官時代; 第4章 民部大蔵兩省仕官時代
4-29	第2編（明治6年～明治42年）実業界指導並ニ社会公共事業尽力時代		
		第1部 実業・経済	第1章 金融; 第2章 交通; 第3章 商工業; 第4章 鉱業; 第5章 農・牧・林・水産業; 第6章 対外事業; 第7章 経済団体及ビ民間諸会; 第8章 政府諸会; 第9章 一般財政経済問題
		第2部 社会公共事業	第1章 社会事業; 第2章 国際親善; 第3章 道德・宗教; 第4章 教育; 第5章 学術及ビ其他ノ文化事業; 第6章 政治・自治行政; 第7章 軍事関係事業; 第8章 其他ノ公共事業
		第3部 身辺	第1章 家庭生活; 第2章 栄誉; 第3章 賀寿; 第4章 同族会; 第5章 交遊; 第6章 旅行; 第7章 実業界引退; 第8章 住宅; 第9章 雑資料
30-57	第3編（明治42年～昭和6年）社会公共事業尽瘁並ニ実業界後援時代		
		第1部 社会公共事業	
		第2部 実業・経済	
		第3部 身辺	
58	索引	事業別年譜、総目次、五十音順款項目索引	

別巻：資料の種別ごと

1-2	日記（慶応4年～昭和5年）; 集会日時通知表
3-4	書簡; 宛名人名録
5-8	講演; 談話
9	遺墨
10	写真

1-2. デジタル版『渋沢栄一伝記資料』（2016.11）

<https://eiichi.shibusawa.or.jp/denkishiryō/digital/main/>

『渋沢栄一伝記資料』 **本編**から

1～57巻をテキスト、画像で公開

資料(抜粋)

網文

見出し

資料(抜粋)

渋沢栄一伝記資料 第一章・第一頁（大正八―二年）
青洲先生、氏は渋沢、名は栄一、青洲は其号なり、天保十一年二月十三日武蔵国横濱郡血洗島に生る。血洗島は関東平野を流る、利根川流域の一小村にして、いま大里郡八基村に属す。○下略

○『渋沢栄一伝記資料』ハ大正八年ヨリ同十二年ニカケテ竜門社ニ於テ編纂セラル。第一章 幼少年時代（天保十一年・二〇）

網文

天保十一年 庚子 二月十三日
武蔵国横濱郡安部領血洗島村ニ生ル。幼名市三郎又栄治郎、幼少時代ノ名乗美雄、後通称ヲ栄一郎名乗ヲ栄一ト改メ、青洲ト号ス。仕官時代一時篤太夫、尋テ篤太郎ト称セシコトアリ。父ハ通称市郎右衛門、名乗美雅、晩香ト号ス。母ハエイ。家ハ世世農ヲ以テ本業トシ、傍ラ養蚕ト製鹽トヲ兼ネ営ム。

見出し

第一部 在郷時代
第一章 幼少年時代



デジタル版『渋沢栄一伝記資料』 伝記資料を検索 ○ AND ○ OR 検索 詳細検索へ >

TOP > 各巻リンク > 第1巻 目次【本文】 > 第1巻(DK010001k) 本文 凡例 更新履歴 このサイトについて

第1巻 (DK010001k) 資料リスト	第1巻 (DK010001k) 本文	次へ (DK010002k) >
-----------------------	--------------------	------------------

公開日: 2016.11.11 / 最終更新日: 2017.12.12

見出し

1編 在郷及び仕官時代
1部 在郷時代
1章 幼少年時代

■網文

第1巻 p.1-61 (DK010001k) ページ画像

天保十一年庚子二月十三日（1840年）

武蔵国横濱郡安部領血洗島村ニ生ル。幼名市三郎又栄治郎、幼少時代ノ名乗美雄、後通称ヲ栄一郎名乗ヲ栄一ト改メ、青洲ト号ス。仕官時代一時篤太夫、尋テ篤太郎ト称セシコトアリ。父ハ通称市郎右衛門、名乗美雅、晩香ト号ス。母ハエイ。家ハ世世農ヲ以テ本業トシ、傍ラ養蚕ト製鹽トヲ兼ネ営ム。

■資料

渋沢栄一伝稿本 第一章・第一頁【大正八―二年】 (DK010001k-0001) 第1巻 p.1 ページ画像

渋沢栄一伝稿本 第一章・第一頁【大正八―二年】
青洲先生、氏は渋沢、名は栄一、青洲は其号なり、天保十一年二月十三日武蔵国横濱郡血洗島に生る。血洗島は関東平野を流る、利根川流域の一小村にして、いま大里郡八基村《オホサト》《ヤットモト》に属す。○下略
○『渋沢栄一伝記資料』ハ大正八年ヨリ同十二年ニカケテ竜門社ニ於テ編纂セルモノニシテ、大正十二年九月ノ震災ニ資料ノ大部分ヲ焼失セルタメニ中止ナル。上梓セラレタルハ第六章マデナリ。

『渋沢栄一伝記資料』第1巻より

```

<kobunset xmlns="http://">
  <info>
    <title>渋沢栄一伝記資料 全文公開システム</title>
    <creator>公益財団法人 渋沢栄一記念財団</creator>
    <wordfilename>DK010001k.doc</wordfilename>
    <modificationhistory>
      <data>
        <date>2016/08/17 ; 2018/04/20 ; 2019/04/10 ; 2019/11/14 ; 2020/02/15</date>
        <modifier>saya ; take ; take ; take ; saya</modifier>
        <comment>修正81 ; 修正351 ; 図表1,5修正 ; 図表1再修正 : 参照429,430,431</comment>
      </data>
    </modificationhistory>
  </info>
  <midashiid>11010000000</midashiid>
  <kobunid>DK010001k</kobunid>
  <kobun>
    <ad>1840</ad>
    <jcal>天保十一年庚子二月十三日</jcal>
    <kobuntext>武蔵国横沢郡安部領血洗島村二生ル。</kobuntext>
  </kobun>
  <other>
    <othertype>0</othertype>
    <otherext></otherext>
  </other>
  <shiryoy>
    <shiryoid>DK010001k-0001</shiryoid>
    <shiryotext>渋沢栄一伝稿本 第一章・第一頁【大正八——二年】<br />
    青洲先生、氏は渋沢、名は栄一、青洲は其号なり、天保十一年二月十三日武蔵
    ○『渋沢栄一伝稿本』ハ大正八年ヨリ<pageimage volume="1" page="2"/>
    </shiryotext>
  </shiryoy>
  </honbun>
  <otherfile>
    <otherData>
      <filename>DK010001f</filename>
      <text>◆◆11010000000◆◆
      ▼▼DK010001f▼▼
      第一編 在郷及仕官時代 (一)
      天保十一年—明治六年
      ★★01001★
      第一部 在郷時代
      第一章 幼少年時代
      DK010001f 1/1
    </text>
  </otherData>
  </otherfile>
</kobunset>

```

<midashi>

<kobun>

<shiryoy>

1編 在郷及仕官時代	見出し
1部 在郷時代	
1章 幼少年時代	

■ 網文

第1巻 p.1-61 (DK010001k) [ページ画像](#)

天保十一年庚子二月十三日 (1840年)

武蔵国横沢郡安部領血洗島村二生ル。幼名市三郎又栄治郎、幼少時代ノ名乗美雄、後通称ヲ栄一郎名乗ヲ栄一ト改メ、青洲ト号ス。仕官時代一時篤太郎、尋テ篤太郎ト称セシコトアリ。父ハ通称市郎右衛門、名乗美雄、晩号ト号ス。母ハエイ。家ハ世世農ヲ以テ本業トシ、傍々養蚕ト製藍トヲ兼セリ。

■ 資料

渋沢栄一伝稿本 第一章・第一頁【大正八——二年】 (DK010001k-0001)

第1巻 p.1 [ページ画像](#)

渋沢栄一伝稿本 第一章・第一頁【大正八——二年】

青洲先生、氏は渋沢、名は栄一、青洲は其号なり、天保十一年二月十三日武蔵国横沢郡血洗島村に生る。血洗島は関東平野を流る利根川流域の一小村にして、いま大里《オホサト》郡八基《ヤツモト》村に属す。○下略

○『渋沢栄一伝稿本』ハ大正八年ヨリ同十二年ニカケテ竜門社ニ於テ編集セルモノニシテ、大正十二年九月ノ震災災ニ資料ノ大部分ヲ焼失セルタメ中止トナル。上梓セラレタルハ第六章マデナリ。

各巻リンク | 第1巻 目次【網文】 | 第1巻 (DK010001k) 資料リスト | ▲ページTOP

資料(抜粋)

渋沢栄一伝稿本 第一章・第一四——一五頁【大正八——二年】 (DK010001k-0002)

第1巻 p.1-2 [ページ画像](#)

渋沢栄一伝稿本 第一章・第一四——一五頁【大正八——二年】

先生の名、幼少の時は市三郎といひ、又栄治郎と改め、実名を美雄とつけたるは十二才前後の事なりしが、後父渋沢誠室の命名によりて栄一と改め、之を通称となせり。安政三年六月先生十七才の時、尾高庭番に就いて名乗を請ひしに、庭番「足下の通称栄一は好き字なり、孔子の言に、春一以貴之といふことあり、一とは仁なり、仁とは諸の善行の統名なり、且名を以て通称するは古の礼なれば、栄一を名乗とし、字をば仁と日はん、孟子に仁則栄、不仁則辱といへり、足下能く仁の一を榮せんと欲せば、百行爲すに足るものなけん」と、是より栄一を名乗とせしめては後まで添ふことなし。但し通称の時には栄一郎と称し、一橋家出仕の初まで之を用ゐたるが、出仕後平岡四郎改めて篤太郎と称せしむ。明治二年静岡藩に仕へし頃、太夫、衛門等の名を改むべき朝命ありしにより、再び改めて篤太郎の称を用ゐたり。幾もなく朝廷仕官の後、正式には源朝臣栄一といひ、ヒデカズと訓まれしが、後いつとはなく音讀して通称とせられしなり。号を青洲といへるは、正式には源朝臣の邸宅の後方に沼ありて、此辺の地名を洲上といへるに基けり。(少年の時の時に洲上小屋と自署せり)

族籍は維新の初は静岡県士族なりしに、明治四年六月、東京に移住せし時、請ひて東京府平民に編入し、後華族に列せらる、これらの事

- 第1巻 p.2 - [ページ画像](#)

は後に委しく記すべし。

独自仕様のxml<kobunset>

デジタル版『渋沢栄一伝記資料』

1-3. デジタル版「実験論語処世談」 (2017.03)

<https://eiichi.shibusawa.or.jp/features/jikkenrongo/>

特徴

- 原文は『渋沢栄一伝記資料』別巻に収載
- 『渋沢栄一伝記資料』別巻公開のプロトタイプとなるシステム・モデルの構築が目的
- マスターデータに構造化されたテキスト(xml)を使用
(独自のマークダウン方式)
- Gitクライアント「SourceTree」を使った編集環境

一八八

竜門雑誌

第三二五号
大正四年六月

○実験論語処世談 (一)

青淵先生

本篇は青淵先生が雑誌「実業之世界」の懇嘱に由り講話せられたるものにて、同社に於ては毎号統載する筈なりと云ふ。(編者識)
△論語に親むに至れる因縁

何故私が孔夫子の論語に親み、之を服膺して今日の如く日常生活の規矩準繩と做すまでに相成つたかは、或は世間の方々の不思議に思はるゝ処であらう。それに就ては、先づ幼年時代に私が受けた教育の順序から申述べねばならぬ。

維新前に於ける教育は、何地とも主として漢籍に依つたものであるが、江戸表などでは初めに「蒙求」とか乃至は又名家文を教へたりしたやうにも聞き及ぶ。然し、私の郷里(今の埼玉県)では先づ初めに

基本構造（デジタル版『伝記資料』とは別仕様のマークダウン）

[[/volume id:JR0010]]

[[title:]]デジタル版「実験論語処世談」(1)

[[description:]]『洪沢栄一伝記資料』別巻第6(洪沢青淵記念財団竜門社, 1968.11)
p.638-645

[[author:]]洪沢栄一

[[source:]]底本:『洪沢栄一伝記資料』別巻第6(洪沢青淵記念財団竜門社, 1968.11)
p.638-645
底本の記事タイトル:一八八 竜門雑誌 第三二五号 大正四年六月:
実験論語処世談(一)/青淵先生
底本の親本:『竜門雑誌』第325号(竜門社,
1915.06)*記事タイトル:実験論語処世訓(一)
初出誌:『実業之世界』第12巻第
11号(実業之世界社, 1915.06.01)

[[/chapter id:JR001012]]

[[title:]]「学而」第一の冒頭

[[title_yomi:]]がくじだいいちのぼうとう

[[#1<]][[RC0101<]]学而時習之。不亦説乎。有朋自遠方来。不亦楽乎。人不知而不愠
不亦君子乎。[[>]]

[[RJ0101<]](学んで時に之を習ふ、亦悦ばしからずや。友あり遠方より来る、亦樂し
からずや。人知らずして怒らず、亦君子ならずや。)[[>]][[>#]]

この章句は論語の冒頭になつてゐるのであるが、筑前の学者亀井道載先生の著はさ
れた「語由」等に拠つても明かなる如く、処世上頗る大切な教訓である。全体の章が
「学而」「有朋」と「人不知而」との三段に分れ、一見何の脈絡も其間に無いかの如くに
思はれるが、互に離すべからざる聯絡がある。「学んで時に之を習ふ亦悦ばしからず
や」とは、「斯文」たる聖人の道を学び、修め習ふといふ事は、仮令単独でも悦ばし
い愉快な次第であるとの意味である。然るに、その上なほ、遠方より来れる友人と共に、
自ら習ひ修めた道を語り明かし、之と共に切磋琢磨して道に進んで行けるやうになつ
て、仮令二三人でも同志の殖えるといふ事は、更に一層愉快な悦ばしい次第である、
と云はねばならぬ。これが「朋あり遠方より来る、亦樂しからずや」の意味である。

[[keywords:]]学而,冒頭

[[chapter/]]

デジタル版「実験論語処世談」(1) / 洪沢栄一

12. 「学而」第一の冒頭

(1)-12

がくじだいいちのぼうとう

学而時習之。不亦説乎。有朋自遠方来。不亦楽乎。人不知而不愠
不亦君子乎。【学而第一】

(学んで時に之を習ふ、亦悦ばしからずや。友あり遠方より来
る、亦樂しからずや。人知らずして怒らず、亦君子ならずや。)

この章句は論語の冒頭になつてゐるのであるが、筑前の学者亀井道載先生の著はさ
れた「語由」等に拠つても明かなる如く、処世上頗る大切な教訓である。全体の章が「学而」「有朋」と「人不知而」との三段に分れ、一見何の脈絡も其間に無いかの如くに思はれるが、互に離すべからざる聯絡がある。「学んで時に之を習ふ亦悦ばしからずや」とは、「斯文」たる聖人の道を学び、修め習ふといふ事は、仮令単独でも悦ばしい愉快な次第であるとの意味である。然るに、その上なほ、遠方より来れる友人と共に、自ら習ひ修めた道を語り明かし、之と共に切磋琢磨して道に進んで行けるやうになつて、仮令二三人でも同志の殖えるといふ事は、更に一層愉快な悦ばしい次第である、と云はねばならぬ。これが「朋あり遠方より来る、亦樂しからずや」の意味である。

2. 『伝記資料』別巻にTEIを適用するに至った経緯

主な問題点

- 個別の特徴を再現することに主眼を置くと、マスター・テキストの仕様が「複数」でできてしまう
- 今後コンテンツを追加する際に、さらに新しい仕様のマスター・テキストができてしまう可能性
- そうでなければ、既存の仕様の中へ、別のコンテンツの内容的・構造的な特徴を落とし込まなければならない
- さらには、マスターとなるテキストデータの長期保存(管理)にも影響がでる可能性
→ 『伝記資料』別巻にTEIの適用を検討開始(2018.11)

2. 『伝記資料』 別巻にTEIを適用するに至った経緯

TEI適用の目的(2019.11)

- 将来も恒常的に利用できる状態を維持するため。つまり、デジタルデータに汎用性を持たせることで、データの永続性を図る。
- デジタル・テキストについて活用の道を開くことで、渋沢栄一関連情報資源の利用価値向上を目指すとともに、人文学、情報科学、統計学等の分野における貢献を行うため。
- これまで明らかになっていなかった情報の抽出や集約、汎用ソフトウェアによる機械的な解析や可視化を可能にするため。

3. TEIを適用して得た知見と課題

対象：『渋沢栄一伝記資料』別巻第1～10

方針

- 書籍1冊まるごとTEI(標題紙から奥付まで)
- 1冊の書籍としての物理的構造(標題紙、凡例、解題、目次、本文、奥付など)だけではなく、複数冊にまたがる内容的構造(編・部・章・節など)をも表現すること

方法

- 物理的構造：書籍単位での構成(1冊で1データ)
- 内容的構造：xml属性で記述
- 階層調整(構造の記述)：空タグ、段落の断片化と再構成

3. TEIを適用して得た知見と課題

知見

a) TEIヘッダーの記述

- 概ね難しいことはなく記述できた

b) 資料「集」であるがゆえの階層構造の記述

- 種別ごと／資料ごとにかたまりとしてタグ付け(<text>, <group>, <div>…)
- 原資料との紐付けを見据えた階層(xml:id付与)
- 後からの修正が大変なので、事前にテキストを読み込んだ上で十分な検討が必要

c) 日本資料特有の問題

- 縦書き→横書き、ルビ、割注、特殊文字、イラストなど
- これらは、ほとんど解決していない(ページ画像が必要?)

3. TEIを適用して得た知見と課題

課題

- エンコーディングの優先事項に関するガイドが欲しい(知見の共有)
 - 構造化 → 物理的構造の分析、内容的構造の分析
 - 紐付け → 原資料とテキストのコントロールに注力
 - 詳細なタグ付けは切れない？
 - リソース提供者としての適切なエンコーディング・レベルとは？
- 日本資料特有の表現に対する解決策
- 日本資料の事例が集積され参照できるようになるとよい
- コミュニティーの必要性
 - 答え合わせ、意見交換…

3. TEIを適用して得た知見と課題

今後の課題

- 『渋沢栄一伝記資料』別巻のTEI適用と公開
- 既存のコンテンツへのTEI適用と公開
- 新規リソースの作成と公開(『論語と算盤』、『竜門雑誌』掲載記事など)
- TEIファイルでの公開(提供)／活用(日付、人物、気象情報等の集約)
- 他機関のリソースとの連携・分析・可視化など

ご清聴ありがとうございました。